

對して山号を支那山といふ他亦うもけ
多し。お別歸恩若氣の東方に某所堂あり
是を神多寺と号ふと云々。當會はあり。當
神多寺の号も根えは本地堂より出ると知
べし。延享三年寅子月此巡見山に勅を傳
案内に出る。後人は對して本地堂を指て
神多寺と作あり。さと云。法史を見あふ人
にり。まや山形あるまに三神多寺あり。事
又小寺氏店內記は當社の神多寺を多目
かりと云。得る。事あり。先年大社考に記
傳れを略す。

神多寺の什物に一振。支那の曼荼羅二幅
天台智者大師の畫像一幅。曼荼羅は智者大師の
畫上より表裏
表裏の書あり十二天の板本。智者大師の作と云。傳り
事あり。實録を引て大社考に
記し傳れ
ハ書あり去る年願恩院流密は十二天の畫像
を請求。於京初是を寫して彩板を彫る。

神多寺本天台なり。室永年中江府麓波山
護持院下となり。去る云。新義の法流をお續に
上古任職し。この傳名。法史旧記に見え。す中
真開山の世代ハ如た。